



日本の未来を考える

一般財団法人 海外通信・放送コンサルティング協力 (JTCC) 理事長

うつみ よしお
内海 善雄



1. はじめに

鈴木理事長に「ITUクラブで話をしろ」と指示され、さて何を話せばよいか考えてみました。皆さんも私と同じ年頃ですから、一番の御関心は健康でしょう。皆さん健康そうな方が多いですし、私も皆さんに負けずに健康なつもりですから、私の健康法についてお話しをしたい。そう事務局の石井さんに申し上げましたら、軽蔑の眼でいらまれてしまいました。私が若かった頃は、彼女ももう少し愛情あふれた目ではほえんでくれたのですが(笑)。そこで考え直し、ITU事務総局長の経験を経て、今現在何を思っているか、ということをお話させていただくことにしました。

2. 小さい地球

まず、事務総局長として世界を飛び回って一番に感じたことは、地球が大変小さいということでした。地球は、1000万分の1に縮小すると、1メートル20センチ。運動会の玉転がしで使う玉程度の大きさになるのです。そしてその2ミリが大気で、海は0.16ミリしかない。その間に全ての生命が宿っています。地球が非常に小さいということを実感すると、人生観や価値観が変わってくるわけです。

最近、例えば脱原発論議が物議を醸していますが、あほらしくて聞いておれません。日本だけ原発をやめてもどうしようもないし、化石燃料は、何百年とはもたないのです。人類がどうやって生きていくべきか、すぐ分かることです。

地球が小さいと感じることは、宇宙を感じるということです。四国88か所お遍路に挑戦してみると、どうも般若心経の

世界は自分が宇宙の一部であると感じることであり、地球が小さいと知ることと共通していると分かってきました。私も大分悟ったのかなという気分になっています。

3. 世界は極めて多様性

もう一つは、世界は非常に様々だということです。こちらの写真1はジュネーブの郊外、フランス領のサレーブの山の上の風景です。そして写真2はモロッコです。モロッコのやぎは石ころを食べているとびっくりして、急いで撮りました。本当は石ころではなく、その間に挟まっている枯れ草を探して食べているのではないのでしょうか。しかし、人間はどうしてこんな貧しいところで暮らしているのでしょうか。モロッコは、スペインまで占領していたアラビア人が、キリスト教徒に反撃され逃げ帰ってきた地域です。ここに住んでいる人たちは一生こうして荒れ果てた砂漠で家畜を育てるだけで、どうしてもっと豊かな地域へ行かないのでしょうか。リスクを取って、もっと豊かな所へ行くことをしなかった、あるいは、する能力がなかったのでしょうか。実は、世界には、このモロッコより、もっともって貧しい地域がいっぱいあるのです。

写真3はシンガポールです。元気がよくて能力があってモチベーションが高い人は、シンガポールに集まって——シンガポールも何十年か前は小さな港町にすぎなかった——このように発展させました。

東京の風景はシンガポールとほとんど同じですが、この東京にある価値観が日本全体を支配しています。このシンガポ



写真1 フランス領サレーブ山頂



写真2 モロッコの砂漠



ールや東京の価値観、利便性、生き方というものは、先ほどのモロッコの人たちには何の関係もありません。また通用するわけでもない。世界中を飛び回っていると、こうしたことをひしひしと感じて、世界中に様々な人類がいるということを実感しました。

4. 日本人はユニーク

さらに、日本人は、全く特異な存在であるということも感じました。常日頃から国際関係に携わっている方は、日本人が他国民に比べて、超お人よし、自虐的、戦略がない、発言しないなど大変ユニークな存在だということを実感されていることと思います。こういう一等ユニークな日本人は、この間の震災でも非常に冷静で、世界の人たちはさらにそのユニークさに驚きました。

5. ものの見方

世界を実際に見ると、世の中に流布している考え方は、現実とはかなり違っているということが分かります。例えば、エジプトには巨大なピラミッドやスフィンクスがあります。実際にカイロまで行って見ると分かりますが、スフィンクスは手前の方にごく小さなものです。もう少しカイロを研究すると、農地のはるか向こうに見えるピラミッドの姿というものがあることが分かります。私は何度もカイロに行きましたが、ある時飛行機がこの近くを飛びました。するとピラミッドのそばまで市街地が広がっていて、また驚きました。砂漠の中のピラミッドとは全然違うのが実態なのです。さらに、クレオパトラの時代のエジプトは、象などがいる森林に覆われていて砂漠などなかったのです。そのときのピラミッドは、森の中にあっただけです。こうして見ると、我々が持っているピラミッドやスフィンクスのイメージは一面的にすぎないことが分かります。そこまで見て、初めて事の本質が分かるのだと思います。

6. 世界を理解するための三つのキーワード

このようなことを経験すると、日本人が世界を理解するためには、三つのキーワードがあると思うようになりました。一つはいろいろな価値観や世界があって、画一的な見方をしてはならないということ、すなわち「多様性・多面性」。もう一つは「本音を知る」ことで、お人よしな日本人に特徴的なの



写真3 シンガポール

ですが、建前だけを聞き表面だけを信じてしまうおばかさんにならないこと、本音は何かをよく考えなければいけません。三つ目は「変化」で、世の中がどんどん変化していることです。今日正しかったことも、明日は全然正しくないという変化に対応する力がない限り世界を理解できないでしょう。この三つが物事を理解するキーワードだと思います。

7. 日本を三つのキーワードで読み解く

さて、この三つのキーワードで現在の日本を見てみましょう。経済成長ゼロ、高失業率、国家財政の破綻、エネルギー政策の破綻、産業の空洞化、少子高齢化、格差の拡大、ひ弱な若者、リーダーシップの欠如——といったように日本の惨状は覆いがたい状況にあるわけです。しかし、日本にも良かった時代があったのはなぜでしょう。日本は、奇跡的な好環境に恵まれて大発展したのです。朝鮮戦争、東西冷戦の最前線、1億人のマーケット、大量生産時代、技術発展の時代、そしてまじめで同質な国民気質がプラスに働いたことが背景にありました。

そうした時代を背景に、アメリカ至上主義や諸国民の公平と信義を信じて戦争を放棄する、GDP至上主義、消費は美德、1億総平等主義、和をもって尊しとする——という価値観が繁栄をもたらしました。それが、ある総理が言った「戦後レジーム」という枠組みです。

ところが、そういう好環境が消失してしまいました。説明すると切りがありませんが、アジア諸国の台頭や冷戦構造の変革、アメリカの凋落、デジタル化等により、好環境は消え失せてしまいました。これらが世の識者が口にする日本凋落の解説です。わたしもそう思います。しかし、日本の現状を三つのキーワードで見た場合にどうなるか、がポイントです。

惨憺たる状況であることは確かですが、それは既成の価値観で見ているからなのではないか。既成の価値観とは要する



にGDP至上主義や経済発展が全てという考え方で、そういった視点によると今の日本は全く暗澹たる状況です。しかし、世の中は変化するわけですから、大国の盛衰は歴史的なスパンでは当たり前のこと。日本に限ったことではありません。当たり前のことをどうして大騒ぎしているのでしょうか。さらに、世界秩序も、世界に占める日本の位置関係も、技術革新の中身も変わりました。変化は当たり前のことなのに、どうしても日本はだめだという話になるのでしょうか。

それから本音——真の目的は何かと考えてみましょう。戦争放棄はアメリカが日本を弱体化するためにそうただけの話だというのに、日本国民はそれをいつまでも信じ切っています。GDP至上主義はアメリカの資本主義体制に入るためのやり方の一つでした。和をもって尊しとか、横並びとか、そういう思想は、大量生産にうまく合った構造を作るのが目的だったのではないのでしょうか。決して和が良いというだけではなかったのではないのでしょうか。私にはこういう風に見えるわけです。

米国一国の米至上主義の世界は多元的になりました。平和主義は、防衛力を強化しなければどうしようもないと尖閣諸島で日本人はやっと気がつきました。今まで持っていた価値が、世の中の変化により変わってしまったのが現状です。

今大きな問題である消費税や脱原発、TPPといった話題は、答えが決まっています。消費税は取らなければ大変なことになると決まり切っていますし、脱原発では人類は現在の生活水準を維持できません。TPPに参加しなければ日本は生きていけません。何もかも分かり切っていることですが、日本では意見が一致せず、反対勢力がものすごく強いんです。消費税については野田総理が頑張りましたが、実現するかどうか怪しい状況です。いくら理屈を並べても、消費税は取られない方が良く、脱原発の方が安心、農家の票を失いたくないというのが本音なのです。世の中が変わったのに価値観を変えられないのです。

正にこれは、氷山の上でたき火をして暖まり、そのうちに溶けてしまうという状態です。それが分かっているのにやめられないのです (写真4)。

8. 日本を救うシナリオ

それでは、どうすれば、変化に対応した価値観を持てるようになるのでしょうか。

ステップ1は、日本の良いところを本当に認識することです。私はジュネーブに行き、世界中を見て日本に帰って来ま



写真4 氷山で焚き火

した。その結果、これほど良い国はないと確信しています。同一民族が同一言語をしゃべる大国は世界中に探してもない。緑あふれる国土で四季がある国も、ヨーロッパなどのごく一部しかありません。清潔で長寿、最高の医療が安くエンジョイできる国——そんな国はほかにありません。美酒と美食、高い文化、暖かい人間、このことを認識したら、こんな日本をつぶしていいと誰も思いません。当たり前のことです。

ステップ2は、日本の現状・惨状を直視することです。直視すれば、この素晴らしい日本をなんとかしなければと誰も思うでしょう。それをバネに日本をなんとかするので。問題を直視すればなんとかしようというエネルギーが絶対出ます。政治家やマスコミは全然問題を直視していません。そして楽観主義者が受けています。問題を直視する人しか改革を実行できませんが、そういう人がいないのが日本の問題です。

そして、ステップ3は、外国人に来てもらうことです。日本を直視して考え方を変えることができない、日本を脱出することもできない——してる人もいますけれども——ということであれば、日本を生き返らせるには外国人に来てもらって、外国人に日本を変えてもらうしか方法はないと考えています。

「2030年の日本へ あらたにす「新聞案内人」の提言」という本が今年出ました。日経、朝日、読売が協力して、「あらたにす」という新聞を比較するウェブサイトがありました。そこには、新聞案内人と言う欄があり、そこに交代でコメントを書いていました。その人たちが2030年に向けて日本をどうしたらいいのかという意見をまとめて提言した本です。私は、そこで、外国人に日本を変えてもらうことを提言しました。しかも、それは、まだ日本に魅力がある今しかチャンスがないのです。あと数年したら、外国人も来てくれなくなるでしょう。その本には、もっと詳しく述べておりますので、興味を持たれた方は御一読いただければ幸甚です。ありがとうございました。

(2012年10月12日 ITUクラブ特別例会より)